

『研究十二月往来』200回記念座談会

〈出席〉

表 章 (法政大学名誉教授)

田口和夫 (文教大学教授)

竹本幹夫 (早稲田大学教授)

荻原達子 (元 鍊仙会事務長)

〈司会〉

笠井賢一 (鍊仙会)

昭和32年1月(「鍊仙」46号)から始まりました表章氏の「百々裏話」の連載が昭和49年3月(「鍊仙」220号)で100回を迎え終了し、ひき続いて、昭和49年6月の「鍊仙」223号から始まりました「研究十二月往来」が今年200回を迎えます。

そこでこの200回を記念して、「百々裏話」の執筆者で、「研究十二月往来」にもお書きいただいた表章氏、また「研究十二月往来」が始まって以来、数多くご執筆していただいた田口和夫氏、竹本幹夫氏、また「百々裏話」の頃から「鍊仙」の編集に携わってこられた荻原達子さんにご出席いただき、これまでの200回を振り返り、「研究十二月往来」の今後についてもお話ししていただきました。

荻原 表先生の「百々裏話」が終られて(「鍊仙」220号 昭和49年3月)、これからは若い研究者で表先生の後を継ぐようなかたちで、何とかしたほうがいいかなと思って、とにかく、まずは田口さんに頼んだんですね。その頃は若い研究者の方々が活気を呈してきた頃だったりするので、うまく順繰りにやっていけないかしらと思つて、それについては「百々裏話」に替わる何か表題があったほうがまとまるから、なにか適当なものはないかと考えていたときに、「翁」の小書の「十二月往来」に「十二月の往来こそめでたう候へ」というのがあるのをひよつと思ひ出したものから、若い方達がこの小論文をもとに、未来へ明るく開けたらいいなと思つて、「十二月

往来」という名を付けたんです。それで第一回が西野春雄さんで、田口さんはまだタイトルが決まらない前に書いていただいたということですよ。

笠井 田口さんの「山伏物以前」(「鍊仙」221号 昭和49年4月)があつて、その次の号に表先生が「百々裏話 摺筆の辞」を書かれて、それで次の223号の西野さんの「七夕」雑考」が「研究十二月往来」の第一回です。
荻原 それがこの始まりだったんです。
笠井 「十二月往来」っていうのは荻原さんのネーミングなんですね。

荻原 ええ。ひよつと思ひ付いただけのことです。西野さんに「いいテーマですね」って、言われた覚えがあるんですけど。それがこんなに200回まで続くなんて思いも寄らなかったけれど、それはやっぱり横道萬里雄先生、表先生のご研究が若い人たちにいろんな意味で刺激を与えて、いろいろな角度から研究されるようになり、これだけ豊かになってきたのかなつていう、やっぱり年月の重みを私は感じます。

田口 表先生が「百々裏話」を始められたときは、この「摺筆の辞」に「三十未滿の若輩で」、「専任講師になつたばかりの駆出し時代」と言われているけど、だからそういうふうな段階がもう一回「十二月往来」でまた始まったなという感じがするんですが。

竹本 そうですね、本当にいい題ですよ。ね。「十二月往来」というのは。

今までの執筆者を一覧しますと、200回で三十八名になります。同じ執筆者が何度も書かせていただいているわけです。なかで田口さんより年上の先生方がお書きになっていくという例が十一なんです。だからまあ四分の三弱ぐらいが若い世代の研究者だということですね。それと東京の執筆者が中心ですね。とくに表先生の薫陶を何らかのかたちで受けた研究者が中心で、地方の研究者は意外な程入っていないですね。

荻原 そうですね。ある時期からやはり地方にもいらしている研究者の方々にも書いていただきたいと思う程度かお願いしたんですけど、なかなかお願いするのがいつもいつも編集間際になって、いろいろ皆さんにもご迷惑をおかけするようなことがあったりして、思うようにいきませんでしたけれど。

田口 まあこの若手っていうところですね、バックナンバーをひっくり返して見てたんですよ。執筆者の肩書きが面白い。例えば2回、3回の堀口康生さんはね、大阪女子大の助手なの。竹本さんは早稲田の院生なんですよね。私は静岡英和女学院短大の助教授で、橋本朝生さんが山形大学講師。というのが11回から19回辺りまでの執筆者の肩書きですね。ようやく研究者になり始めて、「鍊仙」に書かしても

らっているっていうのは非常に大きかったと思うんです。やっぱ「百々裏話」で新しいことの報告、新しい研究の、発見の報告みたいな形が確立されていたから。それを受け継いでそういうことを書けば書けるんだな、ということが、みんなあって、自分の持つてるものの面白いところをとりあえず報告しておきたいということが、これで出来たような感じですね。

竹本 「百々裏話」の後をうけた企画だったという意識が強かったですから。だから選ばれることが非常に名譽だったのです。気合を入れて書きましたものね。特に始めの頃は緊張して書きましたよ。論文と同じくらいのつもりで。逆に言うとパンフレットとしては、内容的には硬すぎるっていうようなこともあったんじゃないかと思えますよ。

荻原 それは当然あったと思いますし、それからやはり四百字詰め原稿でいわば五、六枚のことですよ。そういうこの字数の短かい論文をまとめるっていうことは若い研究者の方にとって、もしかしたら試練の条件でもあったのではないだろうかと思うんですけども。で、それをやって大変うれしかったのは、今ちょうど竹本さんがおっしゃったように皆さん、「百々裏話」の流れを受けて非常に緊張して書いて下さったと思うし、ある時期になってくると様々な視点からの論文

だったためもあって、数が少なくても全国の研究者が、この「百々裏話」及び「研究十二月往来」に注目されて、送ってほしいというふうな注文を受けたときはとても私はやり甲斐を感じました。それからやはり「百々裏話」の時からそうですし、「研究十二月往来」に移ったときもそうですけれども、観世寿夫さんや静夫（現・鍊之壺）さんをはじめ鍊仙会の中心になっていく方が、研究というものと自分たちの舞台とを別個に考えていないというか、研究に演技者の目を向けなければならぬ、っていう姿勢があったっていうことが、多少硬いパンフレットであっても続けられてきた、鍊仙会の姿勢だったように思うんです。

表 若い研究者も鍊仙会には見に来るっていう、なんかそういう関係があったよね。

荻原 ええ、ありました。
竹本 表先生ご自身が学生会員出身でいらっしやいました。執筆者の大半もそうなんですけど。特に東京で勉強した人たちはみんなずっと大学院まで鍊仙会の学生会員でした。舞台が研究の方面に動機づけをしてくれたという側面もありました。鍊仙会ってというのはそういう魅力のある会でしたから。研究面にも影響や刺激を与えてくれた点に、鍊仙会の仕事の存在の意義というか、すごさを感じます。
表 他の能会のパンフレットにも同じよう

な企画が生まれましたよね。形は様々だけれどもちよっと研究的なものを入れる傾向が出てきた。京都の「能」などもそうだ。

竹本 日本文学研究の他の分野ですと、小論文という形、研究コラム的な短いものを書くチャンスってあまり無いんです。ところが実際に「研究十二月往来」に書かせて頂いた感想では、こういう短いものを書くと自分自身の文章がどんどん厳密になっていく感じがありますね。無駄な記述はせずに、きちっとした形で手際よくまとめなきゃいけませんし。ですから、こういう小論文が、研究業績の一つとして位置づけうるんだってことを示した点でも「百々裏話」の果たした役割は大きかったと思います。「研究十二月往来」もその余恵をかなり被っていたんだろうと思います。荻原 やっぱりこれが10回とか20回で終わっちゃったらね、それほどこの意味は広がらなかったと思うけどやはり100回、200回回っていう積み重ね、それからその四十人近い方々に参加し、書いていただってきたことが「研究十二月往来」の価値をさらに深めたのかも知れませんね。

田口さんより年配の方が入っているっていうふうなことだけど、それは、編集上べりぎりぎりになって人も人が決まらなくてSOSで年配の方にお願ひした場合が多いんです。竹本 表先生が何度か書いてくださったり、

池田廣司先生ですとか、外村久江先生とか、最近では水原一先生がお書き下さってますよね。そのために誌面に変化が出て、若い人たちの固い論ばかりじゃなくて、読者はむしろほっとしていると思います。

表 僕は大体ピンチヒッターでした。

荻原 ほんといつもいつもそうでした。もういかにこちらが怠慢かっていうのがこれを見れば分かるという……。

表 「十二月往来」を書くときだって、「百々裏話」の時と同様に緊張して書きましたよ。

荻原 これだけの中にはちよっとした発見がやがて大きな論文になったのもあるしね。

表 「鏡仙」に載っているのが勿体ないと思うものも時々ありますね。もつとも後で大きな論文にすればそれでいいんだろうけど……。

竹本 でも研究の情報源として、今「鏡仙」は見逃せませんからね。研究展望なんか書くときも「鏡仙」に何が書いてあったか見ますよね。これは他分野の研究ではふつうはありません。これは他分野の研究ではふつうはありえないんでね。パンフレットに書いてたものを業績にするなんていうのは。しかし『鏡仙』については、少なくとも中世文学の外の分野の人たちも割と評価してくれているんだと思います。ただ、バックナンバーがなかなか手に入りにくいんで、能楽研究所と能楽資料センター、演劇博物館ぐらいですか。だから大学

生なんかは「鏡仙」を気軽に見られないかもしれないですね。それでも研究的な位置は、表先生が「百々裏話」をお書きになって以来、きちっと地位を築いたと言えます。

田口 表先生がなさった「百々裏話」の中にある論文が長大な論文に成長していくという裏付けがあるから、その後今度は竹本さんの「素囃子の変遷」も中心的な論文に大きくなっていくわけですね。まあそういうふうなものもあるし、私なんぞは小さい発見ばかり多いけれども、そういうのも今までは無かったもので、真剣に扱われてなかったものからの発見で、それをなるべくこへ書いておきたいということがあって、それで読むに値する中身がそろってきたということがあります。

竹本 「百々裏話」の目録と「研究十二月往来」の目録を比べてみますと基本的な方向としては、資料研究とか歴史研究とかが中心を占めています。ただし「百々裏話」は資料研究、資料紹介という側面がかなりありましたよね。まだこの当時はそういう形で資料を掘り紹介していく時代だったのが、今田口さんがおっしゃったように、たんに「こんな資料がありますよ」というんじゃないで、資料を読み込んでその中から新しい意味を発見していくっていうような研究が増えてるのが、「十二月往来」の新しい所なわけですよ。しかも書き手が毎回違うから、いろんな視点の

ものが出来上がってくる。そうした変化があるって事も200回続いてきた大きな原因なんだろうと思います。

私この間たまたま「能楽タイムズ」の昭和40年7月号を見ましたら、小西甚一先生が丸岡明さんと対談をなさっていて、丸岡さんが小西先生に「最近能の研究は沈滞気味だ」って突っ込んでいて、小西先生が困惑気味に「いやそんなこともありませんがね」っておっしゃってる記事があったんですが、ちょうど表先生が「百々裏話」を書いてらっしゃるころで、今の我々から見ると研究的にはもの凄い充実期なんですけれども、あの当時の一般の能楽ファンの人たちには、逆に研究が専門化して、ちょっと近づき難いっていう感じがあったんですかね。

荻原 ええ、今のように皆さんの研究したものが身軽に読めるような状態ではまだなかったですよ。

竹本 当時は香西精先生とか表先生とかが研究の水準をどんどんどんどん引っ張っていった時代で、伊藤正義先生もそれに呼応して新しい研究を次々に発表なさっていたという時代なんです。それ以前の戦前から戦争直後辺りまでにかけての百家争鳴的な状況っていうのは逆に無くなってきているわけですよ。

荻原 丸岡さんがおっしゃってたのはね、もしかしたら作品に対する研究が少ない、沈滞

している、そういう意味でおっしゃったんじゃないかしら。

竹本 ある意味で好き放題に物が言えなくなってきた時代があったんでしょうね。作品研究なんかは「研究十二月往来」になってからかなり出るようになりましてけどね。

荻原 だからさっき竹本さんがおっしゃったような手順を踏まえて、やはり作品にもっと近づいた研究の仕方っていうのが割と出て来てますよね。やっぱり作品論っていうのは直接に役者に働き掛けもするから、本当はもっとほしいものですね。

竹本 そうですね。資料研究も役者の方が「こんな珍しい資料があるのか」って見て下さる方もいるかもしれないけれども、作品の解釈だとかいったものについて、又は新しい演出の可能性について、提案をしていけばお互いの交流になりますよね。特に作品論と演出研究は、「百々裏話」の時代には無かった研究分野です。作品論では三宅晶子さん、演出論では小田幸子さん、山中玲子さんが中心で、演出論には実際の舞台にも反映されるような演出研究も少なくありません。

田口 竹本さんと私が交互に書かせてもらった時期が結構長いんですよ。

笠井 31回から54回まで二年半ぐらいですね。

田口 自分としては非常にありがたくてね、いろいろ書けたんで良かったんですが、考え

てみたら「鏡仙」を相当二人で占領して申し訳ないことしたような。

荻原 この辺はとにかく二人に困ったんですよ。それでお二人で一年間か二年間やっていただこうかなと思った時期がありましたね。で、その以後ね、ちょっと表先生にご相談したりして何人か挙げていただいた覚えがあります。竹本さんにも相談した覚えがあります。それで落合博志さんなんかが出て来たっていうような覚えがあるんです。だからこの頃はね、「あ、この人いいな」って思うような人たちがなかなか見つからなかった時期だったんです。

田口 ちょっと準備段階だったわけですね。

竹本 世代交代期ですね。新しい世代が出て来て。

田口 だから我々が終わった段階辺りから天野文雄さんが書き始めてますね、天野さんが43回のところまで書いてるんだよね。

荻原 で、多分ね、松岡心平さんなんかこの辺りはまだ学生だったんですよ。

田口 そうそう。松岡さんは55回で「了俊一子伝」を書いていて、東大の博士課程。落合さんなんかはすごいことで57回のところから「文学部学生」って書いてあるんですよ。その辺から新しい世代が現れてきたっていうんです。非常にこれよく分かるのね。どこのところで登場してくるか。そういう新しい芽がここで動いているんだなっていう感じがね。そ

れから62回で山中さんが東大院生でしょ。今中心になってる人たちが大分出て来て。69回が三宅さんで、71回で表きよしさん辺りが出て来て。みんな院生か、講師かくらい。この「鍊仙」の一覧見てるだけで能楽の研究の状況、流れが見えてくるっていう。

表 この「鍊仙」という場合は、観世流だから観世流のことでないはずとかいうことがほとんど無かった。そういう点はもう、皆さんおそらく全く意識せずに書いておられると思うんで、それは大変強みですね。まあ例えば雑誌「観世」などだと、どうしても観世流以外のことを書きにくい。「鍊仙」はその点、観世流ではあるけれど何を書いても自由だったという雰囲気があった。

竹本 読者の層が「観世」だと観世流の方が中心ですから、そこで外の流儀のことを書いてもなかなか読んでもらえないって事はありませんよ。「鍊仙」も最初はそうだったんじゃないかと思いますが、私、昔「鶉祭」小考」っていう、金春にしかない能のことを書いて、「場違いだ」と表先生からひどく叱られた思いがあります。でもそういう蛮勇を積み重ねた結果か、今の若い人たちは全然屈託無く書いてますね。

田口 まあ「鍊仙」の読者層、鍊仙会の観客層が観世流だけを見るという層だけじゃなかったから。

荻原 そう、確かに鍊仙会に来るお客様の為のパンフレットではあるけれども、能っていう、大きなテーマに向かってるのが鍊仙会の行き方だっていうふうには私は理解してたものですから、あんまり私自身がそこに拘泥しなかったし、それからまた寿夫さんにしても静夫さんにしても、そういうことをとやかくおっしゃらなかつたっていうこともあって、自然にそういう風が定着していったんじゃないかと思うんですけれど。

竹本 狂言研究が比較的少ないように思いますが、どうです？

荻原 研究者が少ないからですよ。

竹本 田口さんが書いて下さらないから。(笑) 荻原 だから田口さんか橋本さんかっていうことにどうしてもなっちゃやう。だから研究者が少ないのかしらねえ。まあ、もっと例えば林和利さんに書いてもらえばよかつたとか色々ありますけれども。

田口 確かに相対的には少なかつた。ただ私を書くときにはやっぱり比較的狂言のことを書こうと思いつつ、そうでもないのも書いた。竹本 狂言研究者の数は確かに少ないですけど、それが誌面に反映しているわけですね。むしろこちらから持ち込むくらいでないと本当はいけないんでしょうけど。

荻原 いや、頼むほうもあなたは何月ってなるべく早くお願いしようよと思いつながら

もついぎりぎりになってしまつて。ある時期から一年前にお願ひするような方向もとりましたけど…。

田口 こういう小論っていうのは、以前高校で教えていた頃の教材でね「発見の手帳」という教材があつて、人間何度も同じ事を発見するんだっていう、だから京都大学式のカードに発見したことを書いて、何行かその中身について書いておくと何年か経つてまた同じことを発見することに気が付く、っていうことをね、教えながらいたく感銘いたしまして、それで自分で作つて、気が付いたことを全部書いて行つたわけ。一ページ一つ。それが大体この中にいけるんですよ。こういう小論でまずは報告しておいて、それからまたいずれ大きくなるっていうこともある。

竹本 逆にテーマになる、材料となる資料をいつもいつも見えないと「鍊仙」に書くネタが出てこない、頼まれてもネタがないとかがつていう情けない状況になるんですね。いつも勉強してないといけないって事はあります。田口さんと交代で書かせていただいたときは、やっぱりきつかつたですね、正直に言つて。表先生の「百々裏話」がいかに大変だつたかと思つています。他の仕事も、なかなか出来ないくらいでした。

表 でも書くという事は本当に勉強になりますね。今「観世」に連載を毎月書かされ

ているんだけど、勉強し直す実にいい機会になった。「こんなはまだ問題が残ってたか」っていうことが次々分かった。だから書く当てがあるっていうのは研究者にとって大変いいことですね。毎回追われるぐらいでない、ほんと勉強しないもんですからね。だから若い人なんかでもね、一年くらい前に、何月号に書いて下さいって頼んでおけば、準備していいタネ見つけて書いてくれるんだろうと思いますけどね。

荻原 ここ何年と同じような人たちが書いてるようですが、今書かれています次の世代の人たち、そっちの見通しはどんなふうですか？

竹本 最近では重田みちさんの仕事が「十二月往来」では特に注目したいと私は思います。良い成果を挙げてるなあと思います。だからこの重田さんの世代から下は、これから論文を書きましようという人たちが中心でしょうから、編集者の立場では、その辺りの人たちに頼むっていうのはかなり見識がいるとおもいますよ。

表 若い人では石井倫子さんくらいが一番若くなるのかしら。

竹本 そうですね。それから、柴佳世乃さんもお若い方ですか。実際の執筆者としては、そのくらいですか。

田口 柴さんは説話の研究の方。

竹本 じゃあ能楽の方では石井さんがいちばんお若いんですね。

表 もっと若い人も出て来てるんだけど、まだ大丈夫だっていう程の印象にはならないと思うなあ。

竹本 関西の人で何人か優秀な人がいますよ。これからは全国レベルで執筆者層を広げていくっていう工夫があってもいいかなあって思いますけどね。

表 しかしこの執筆者の一覧を見るとねえ、人材が豊富になったって思うな。僕が「百々裏話」を始めたころに比べるとねえ、本当に研究者の人材は豊富になった。

荻原 そうですね。本当に。

笠井 本日は長い時間貴重なお話ありがとうございました。ございました。これからも「研究十二月往来」は「鍔仙」の柱として続けていきたいと思っております。

本日のお話を参考にさせていただき、より幅広く、また若い世代にも開かれた研究発表の場としていきたいと思えます。

(平成12年3月31日 鍔仙会能楽研修所にて)